

西性寺

西性寺は、大森町の中心部のちょうど西側に位置する中世の浄土真宗（浄土）の仏教寺院です。この境内最古の建物は、その内部が1739年に建てられた大きな本堂ですが、西照寺では、その特徴的な経蔵がより有名です。この寺の経典を保存しているこの建物は、明治時代（1868–1912）から第二次世界大戦前の1930年代後半にかけて石見地方で盛んになった芸術のひとつ、鍍絵という漆喰のレリーフ画で装飾されています。鍍絵は、寺院の建築物や豪商の家と蔵の装飾によく使われていました。火事や悪霊を追い払うと信じられていた龍や、豊穡や商売繁盛を象徴した兎など、縁起の良い図柄がよく用いられていました。石見の漆喰細工の人気は東京や大阪にまで及び、石見の職人は、国会議事堂や、東宮御所などの建築物の装飾に雇われました。

西性寺の鍍絵は、鍍絵の名人のひとりと考えられている松浦栄吉（1858–1927）の作品です。松浦が1918年に60歳になった後に制作されたもので、鳳凰（ほうおう、中国語ではフオンファン）と呼ばれる神話上の鳥、中国神話で「花の王」とされる牡丹、皇室の家紋を飾り、また、日本のパスポートから50円玉までのあらゆるものに描かれた日本の国家の象徴となっている菊の花などが含まれています。

松浦は、石見銀山に近い日本海側の町、仁摩町の出身です。彼の輝かしい経歴には、東京、大阪、福岡、そして当時は日本の植民地であった韓国の複数の都市での任務が含まれています。墓所は西性寺墓地にあります。